



医療にも見守りにも、 過疎地に適したやり方がある

時計をつけるだけで家族と先生が見守れる。
医療と見守りを同時に実現。



オンライン診療の様子。現在月に1～2回実施している。

①高齢でも簡単に使える

ユーザーの年齢層は70代の高齢者が中心となっており、いつでもどこでも安否と位置がわかることから使いやすいと好評をいただいています。

②緊急時は自動でお知らせ

手首の皮膚にLEDライトを照射し、心拍数を常に計測。高/低心拍を検知し家族にお知らせします。ワンタッチでのSOSも可能です。

③安価な汎用医療機器を活用

「Hachi」は医療機器認定(*1)を持つApple Watch (Apple社販売)を使っています。心拍数・運動量・睡眠時間・血中酸素飽和度などのバイタルデータを測定、健康増進に活用できます。

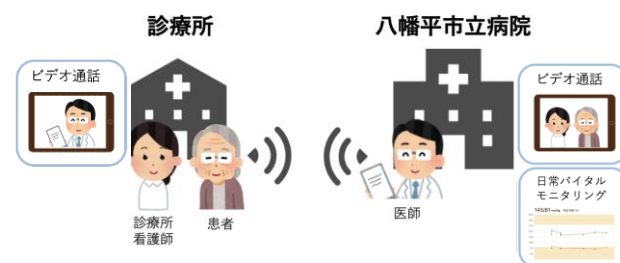
(*1)Apple Watchに標準搭載されている心拍測定プログラム及び心電図測定プログラムが米国FDA・日本PMDAにて医療機器認定を受けている。

地域住民が必要とする 診療所を目指す

- ①日常バイタル活用による健康状態把握
- ②既存診療所・スタッフを活用
- ③煩雑な専用システムを使わない

八幡平市モデルでは、日常のバイタルデータを活用し、遠隔からでも患者の健康状態をしっかりと把握することで、患者と医療従事者双方に安心感と医療への信頼を提供します。このモデルでは、既存の診療所のシステムや看護師などのサポートを取り入れることで、高齢の患者も安心して診察を受けることが可能です。

従来のビデオ通話のみのオンライン診療にとどまらず、「DtoPwithN(Doctor to Patient with Nurse)」の仕組みを採用し、診療所で看護師がバイタル測定を行いながら画面越しに医師が診察するため、患者の負担を軽減します。また、PHR（パーソナル・ヘルス・レコード）の活用により、より正確で質の高い診療を実現しています。このシステムを通じて、安心と信頼の医療を提供し、患者の心身の健康を支えていきます。



↑医師は遠隔で、看護師と患者は診療所から診療に参加



医療確保と見守りにとどまらない 医療×ITの可能性

■疾患発症予測AI開発

脳卒中は厚生労働省の掲げる重点分野5疾患・5事業にも取り上げられている疾患であり、岩手県でも県を挙げた発症予防を行っています。本プロジェクトでは、見守りにより継続的に取得される匿名バイタルデータを活用し、脳血管疾患等の発症リスクを早期にアラートする「疾病発症リスク予測AI」の開発事業を行います。

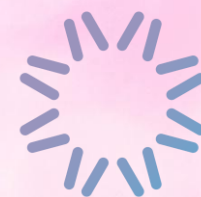
■ドローンによる山間部支援

＜生活弱者支援＞
市内中山間地域の多くで高齢化が進み、生活移動が困難となる高齢者が出てきています。民間のトラック宅配、買い物バス、近隣との乗り合いなどでなんとか運用を行っていますが、周辺部では既にそれも難しくなりつつあります。ドローンの活用により必要部分の物流を支援しつつ、買い物による住民の社会的活動も支援します。

＜ドローンによる医薬品配送＞

田山診療所から田山地区の方へ医薬品をドローンで配送する実証実験を毎年実施しています。今年度はレベル3.5飛行(※)の条件で望月先生が処方した医薬品を実際に配送します。

※レベル3.5飛行：2023年12月に新設された飛行条件。通常ドローンでの配送には配送を目視で監視する人が必要ですが、国が定めた安全対策を講じることで目視外飛行時の道路や鉄道の横断が容易化されます。



HACHIMANTAI
MEDTECH
VALLEY

令和7年度

八幡平市 メディテックバレー シンポジウム

PHRと地域医療DXの5年間の歩みとこれから

令和7年11月25日(火) 13:30～16:30 八幡平市西根地区市民センター

13:40～14:10

オンライン診療の今後の可能性



八幡平市病院事業管理者
兼 八幡平市立病院統括院長
全国自治体病院協議会 会長

望月 泉

14:10～14:40

ウェアラブルデバイスを活用した 訪問看護の展開



和洋女子大学 看護学部 助教

天谷 尚子

14:50～15:20

医薬品ドローン配送のこれまでの歩み



いわてドローンコンソーシアム 代表理事

石川 啓

15:20～15:50

スパルタキャンプのこれまでとこれから



株式会社NEXT REVOLUTION 代表取締役

高橋 一真

15:50～16:20

“課題”こそ地域における最高の資源 ～過疎地から始まるDX革命～



八幡平市役所 商工観光課 課長補佐

中軽米 真人



佐々木 孝弘 Takahiro Sasaki

八幡平メディテックバレーコンソーシアム会長 八幡平市長。
1962年八幡平市大更生まれ。83年に旧西根町役場職員となり、八幡平市に合併後は市民課長、企画財政課長などを歴任した。2020年4月から八幡平市副市長を務めたのち翌5月に退任。少子化対策や、国際都市としてのブランド向上、産業振興や中心市街地の活性化に加えて、本メディテックバレー構想に基づいた心身ともに健康なまちづくりなどを公約に掲げて出馬。多くの市民の信託を得て、21年10月に第2代八幡平市長として就任した。



望月 泉 Izumi Mochizuki

八幡平市立病院統括院長 全国自治体病院協議会 会長。
東北大学医学部卒業。1988年に県立中央病院の消化器外科長、副院長を歴任。平成24年に同病院の院長に就任し、高度・先進医療の実施と共に医師不足が深刻な公的病院の支援及び地域包括連携や地域完結型医療の実現に貢献する。定年の2018年3月末まで務め、2018年4月より八幡平市の病院事業管理者及び八幡平市国民健康保険西根病院統括院長に就任、2020年に西根病院から八幡平市立病院へ移転に伴い八幡平市立病院統括院長に就任、現在に至る。



天谷 尚子 Naoko Amaya

セコム医療システム株式会社、公益財団法人日本訪問看護財団で訪問看護師として勤務。同財団の研修事業部では、訪問看護師の現任教育に従事した。了徳寺大学助手、日本大学大学院総合社会情報研究科博士前期課程修了後、和洋女子大学着任、現職に至る。大学では地域・在宅看護学関連の授業や実習を担当し、看護師を目指す学生の教育を行っている。



石川 啓 Toru Ishikawa

1995年3月 大学卒業後、(株)現代広告社（現：ゲンダイエージェンシー株式会社（2411）東証スタンダード）入社、同社本社デザイン室長に就任。1998年、家業を継ぐ為に帰郷し湊運輸倉庫(株)入社。2008年に民間まちづくり会社 MORIOKA3rings合同会社を有志3名で設立、盛岡市菜園エリアで現代版家守事業を展開。同年、内閣府平成20年度「地方の元気再生事業」採択。2011年東日本大震災津波後、MORIOKA3rings合同会社を解散。2015年に湊運輸倉庫(株)代表取締役就任、2017年ドローン事業部（DRONE PEAK）を設置。



高橋 一真 Kazuma Takahashi

2000年4月、アルプス電気株式会社（現：アルプスアルパイン株式会社）に入社。2002年4月、盛岡市内のIT企業へ転職し、首都圏での勤務を経て岩手へUターン。2015年、スパルタキャンプを受講後、2016年に同キャンプの運営会社である株式会社NOWALLに入社。2018年1月、株式会社NEXT REVOLUTIONを設立し、代表取締役に就任しスパルタキャンプの運営を引き継ぐ。ミッションは「一人でも多くの人が笑顔になれる社会をつくる」こと。IT・人材育成・地域活性などの事業を展開している。



中軽米 真人 Makoto Nakakarumai

どこに住んでいても、どんな環境であろうとも、誰もが楽しみながら働ける未来を築く、「起業志民プロジェクト」のファウンダー／黒幕にして、スパルタキャンプ塾長（市役所の人）。世界中から起業家を志す熱い若者たちを過疎地に集め、ゼロからスタートアップを創造、拡大する。新規事業の立ち上げが大好きで、趣味の活動も含めるとこれまで100社以上の立ち上げに関与。「おもしろいか、おもしろくないか」だけを行動原理に生きる公務員。こうした活動を評価いただき、「地方公務員が本当にすごい！と思う地方公務員アワード2023」受賞。

過疎地だからこそできる！

人口減でも持続可能な 社会基盤作りで もっと安心して住めるまちに



はじめに

全国の過疎地は人口減に端を発する過疎地課題に直面しています。これから地方が取り組むべきは「人口減でも持続可能な社会基盤の創出」であり、私達はこの最適解となりうるのが、ITの活用であると考えています。

我々が今年度着目した課題は大きく2つ、医師確保困難と高齢者見守り担い手不足です。八幡平市の先進事例を、地域課題の具体的解決及び政策を考える一助となればと思ってやみません。

我々が挑戦する課題

■ 医師確保困難

2020年度からは無医地区が発生してしまった八幡平市では、医師が自ら往復2時間かけて通い、なんとか診療を継続しています。限られたマンパワーで地域医療を維持するべく努力を続けてきたところですが、現場医師からも現行システムを続けることの限界が指摘されています。

■ 高齢者見守りの担い手不足

超高齢化により既に50%を超える高齢化率が指摘されている地区もあり、かつ独居や高齢者のみ世帯が高齢世帯の半分以上を占めます。見守る側も見守られる側も高齢化し、従来の訪問・対面による見守りの継続が難しくなっています。



ICTを活用した遠隔見守りの仕組み

高齢者本人が使える、遠方で多忙な家族にも使いやすく、地域と行政の負担は最小限に。そんなシステム構築を行っています。

■ 遠くの家族も見守りに参加

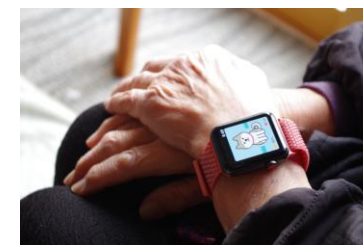
操作不要で簡単なシステムを採用することで、高齢者・家族双方が自力で使うことが出来、家族も両親の日常安否確認ができます。急変時は自動で遠方家族にお知らせ、家族から状況確認等を行います。

■ 地域・行政の負担は最小限

家族と連携することで、地域と行政の見守り負担を最小限にします。

■ 健康増進への応用

日常の心拍数・歩数・睡眠・血圧等を活用して見守りを行い、家族にもわかりやすく提示。取得したバイタルデータは診療・予防医療・介護に活用します。



みまもりサービス Hachi[ハチ]
Apple Watchを装着するイメージ